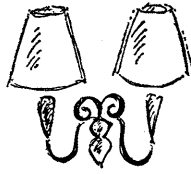


道を尋ねて



ハイジャックを初めとする大掛りな人質誘拐事件の多発する傍ら、少年期自殺の急増などの痛ましい事件が世界的に生じている世相を見るにつけても、人間社会のどこかが狂っているのではなからうかと考えたくなる。

それにしても、望ましい社会というものはどういうものだろうか。私には生の哲学者ルートヴィヒ・クラークス（一八七四—一九五六）が「ゲーテ的人間像のための覚書」（一

千谷七郎

九一七）の中で述べている一節が思い出される。

「最後のヨーロッパ文化の最後の代表者として、ゲーテはまた最後のヨーロッパ的社会の一人の代表者でもあった。今日では社会というほどのものはなくなつて、あるのはせいぜい国家、その交通管理、そしてその傍らに實際上、もしくは臆測的に似通つた頭脳や気持ちを抱く同好者からなる集会ぐ

らいなものである。

これに対し、古代的意味の社会にあっては、『情性』（エロス）が組織化されてあったのである。従つてそのためには衣服や住居や調度品万般においても、またそれと同程度に公私を問わず社会の全ての形態においても、ある様式を形作る能力をもつ人間性というものが前提にあった。その様式をおとなの理解に満ちた指導によつて子孫に伝えるところに当時の人間形成の課題があった。

世に出んとする「徒弟」の側には尊敬して見上げる眼と素直な習得とがあり、「親方」の側には親身な教示と見届けとがあつて、老いと若き、行く者と来る者との間に断ち切ることのできない情の絆が結ばれたので、この絆によつてのみ祖先の遺産が時代の渦潮に消されることなく受け継がれて、世代の交替を経ながら新たなものの創造を見て来た。

……人間が交わりを結び、そして再び交わりを断つ時々、あの優しくも高貴な、或いは心乱れて苦汁に満ちた諸感情一般をゲータ以上に隈なく私どもに解きほぐしてくれた人はかつていなかった。

彼は同時に『醇風』と『良俗』、そして人の情（エロス）に根差す『法』に支えられた古代にほぼ等しい程度の処世の規

準を告げ知らすことのできた偉大にして優雅な人であった」

私どもはこれで以て直ちに賢者ゲータをお手本として真似ることができないものではない。ただゲータ及びクラীগスに示唆されて垣間見ることのできた本来の社会の成り立ちと、私どもの名のに過ぎないように思われる現代社会との距りこそ、私どもの省察を促してやまないものを示唆していると思われる。特に地球資源の限界、人口増加などによつて、国家的にも、個人的にも自己規制の強化が要請されなくてはならない今日において一層切実な思いがする。

要点は「人の情（エロス）に根差す『法』に支えられた古代」の中身にあるだろう。しかし古代が全てそうであつたというわけではなく、むしろエロスに根差す『法』は既に有史時代から徐々に破壊され初めていることは明らかであるけれども、古代ではそれが悲劇と見られていた。

例えば、ギリシア悲劇に出てくるアンチゴネの献身は、人間の心を最も感動させた悲劇として知られている。西紀前四世紀頃の悲劇作家エウリピデス、ソフォクレスが共に扱って

いるもので、近頃はいい日本訳もあるので、お読みになっている方も多いと思う。

アンチゴネはオイディプス王の娘で、当時テーベとの戦いがあり、その戦いに参加した兄ポリネーケスが戦いに敗死する。その時、勝利した新テーベ王エテオクレオンは、ポリネーケスに対する憎しみから屍体の埋葬を禁じてそのまま放置させ、動物あるいは鳥がつつくまにまかせたわけであるが、妹のアンチゴネは放っておくに忍びず、禁令を犯して埋葬する。

そのため、アンチゴネは捕えられ、地下牢に入れられ、食物を与えられない。しかし、新王の子息ハイモンはアンチゴネに心を寄せていたので、救出をはかって地下の牢屋に忍び込んだけれども、その時既にアンチゴネは縊死していた。つまり、餓死を避けて自ら首をくくって死んでいった。

ハイモンも悲しみのあまり、アンチゴネの上に重なって死に、子息の死を見て母親もまた自ら命を断つという悲劇であるが、そのアンチゴネが兄の屍体の埋葬を決意する前に、王の禁令に従うべきか、それとも同胞愛の自然の聲に従うべきかに迷ったとき、「なら、その憎しみには加わらず、愛に加わるがわたしの性」と語ったと、ソフォクレスは伝えて、千

古万古にわたって人々の感動をよんでいる次第である。

実定法に対する自然法の勝利という言葉も、このアンチゴネにまつわる悲劇に関していわれたことであるけれども、実質は人の情性に根差す「法」を無視するような悪法が人類の悲劇を生むことを戒めたものと見るべきであろう。エテクレオンの発した禁令は個人的な憎しみに眩んだ権力意志、支配欲の発現であったのだから。

さきほどから「法」と鉤括弧に入れて来たのは、エロスに根差した法というのは、元来人為によって定められた後代の法とは異質のものであるからである。従って自然法の法も鉤括弧で囲むべきであろう。

かつて私自身訪れて深い感動を受けたのであるが、フランスのドルドーニュ地方は先史学の宝庫と言われている通り、そのレ・ゼジーの国立先史学博物館には若い女性の素朴な墓が復元してあった。紀元前三万年か四万年の頃、旧石器時代から新石器時代への移行期のものと言われており、また文字の発見もなかった当時の人間のエロスの心性に由来したものと考えなければならぬだろう。

このような「人間のエロスに根差した『法』」は、東アジアでは道と呼ばれていたようである。卑近な例で見ると、紫式部の見識を示すものとしてよく引用される源氏物語の螢の巻の箇所がある。物語りに明け暮れる玉鬘の部屋を訪ねた源氏が物語論をする一節である。

そもそも物語は神世以来の、この世にある事柄を記して置くものであった筈である。この点から見ると「日本紀など」は、ただ、片そばぞかし、つまり、朝廷の正史である六国史などは国の表面的公用の記事だけのもの、物事や人々の心に触れていない、ただ部分的なものに過ぎない。これに對すれば「これら（物語）にこそ、道々しく、くはしき事はあらめ」と言つて玉鬘と和解する。物語のなかにこそ、人が生きて行く上での「道」万般が籠められているようです、と云うことである。

「物語には」その人のうへとて、有りのまゝに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人の有様の、見るにもあかず、聞くにもあまることを、後の世にいひ伝へまほしきふしぶしを、心にこめがたくて、言ひおきはじめたるなり」と物語の本質、「事の心」を解きほぐして見せている通り、この道は儒教、仏教、基督教以前から受け継がれてい

る生活の道であつて「ものの心」、「もののあわれ」を知る道でもある。

それはもしゲーテ、クラークスを更に引用すれば、宇宙生成のエロスに組みこまれた人間のエロスに根差す道ということになるだろう。つまり「ものみは、一つの息吹き、一つ流れに感じ合う」という言葉に含蓄される大宇宙と小宇宙の考想に導かれるであろうし、それはまた古代中国の老子の道であつたことも知られている。

しかし、このような道を時代と共に破壊しつづけて来たものもまた人間以外にはないところに今日の問題が集約されることに注目しなければならぬ。

それはソフォクレスの悲劇『アンチゴネ』に関連して、エテクレオンの個人的権力意志、支配欲として示唆しておいたところである。それは程度の差こそあれ、多数の人々にもある意欲ではあるが、それが独走的になつて目的のために手段を択ばない、ただ権力意志の誇示のための権力意志の形にまで増長すると、小にしては固陋なエゴイズム、大にしては狂信の徒、意志の狂気ということになって、この世の道の最大の破壊者を生む。

意志と言えは絶対のものというような一種の風潮があつて、「精神一到何事か成らざらん」という中国伝来の教えの下に、意志の鍛錬、錬成が目ざされることになるけれども、それが破壊者とならないためには、意志の担い手がここで述べて来たばかりの道に保障されていなければならぬ。

そもそも意志の本質は何かと問われるならば、それは破壊であると答えなければならぬ。何故なら、意志とは、これを定義するなら「あるがままにしておきたくない」精神的動向であるからである。それは目的の善悪を問わずそうであることをよく洞察しなければならぬ。「過ぎたるは及ばざるが如し」の教えの深意もここにある。エロスに根差す道に支えられてこそ、意志は公共に寄与することができるということである。そこで、道に対する敬虔な心の薄らぎこそ最大の危険信号であることが思われて来る。

それにしても、錬成や意志のエネルギーは決して無償で購われるものでなく、その反対に劣らないほど危険を孕んでいる。確かに自らを持って、自分を意のままに動かすことのできる人だけが大事業を成し遂げ、それを手懸りに、より高い

目標の実現を見る。柔いということは確かに柔弱に近いが、強い意志や錬成は苛酷に近く、この世の中のあらゆる楽しみの中でせいぜい成功の楽しみしか残されていない、あの打算的な冷酷に通じる。ここには得意と失意とを両極とする感情の往復しかない。

世の母親と共に考えたいと思うことは、確かに子は子宝で、わが子ではあるが、同時に授りものでもあるので、社会に真に有為であるべき一員として育てることを心掛けてこそ、母性の大地母に比せられるような偉大さが生れるのである。かろうか、ということである。

たちねに借錢乞はなかりけり 其角

(東京女子医科大学)